

参 觀 記

— 東京市玉姫町市民館 —

新 庄 よ し こ

三月十日保育實習生二十餘名と淺草玉姫市民館
に行く。

乳 幼 兒 室

二階の乳幼児室にはいとまづ可愛らしいベツ
トがストツを中央にして二十五六並んで居るの
が目につく。こゝは四歳までの子供の室で一人遊
びをしても危険のないやうにといふ設備上の注意
がそここゝにうかがはれる。淡紅、水色のセルロ
イド、赤ちやん用の玩具が天井から下げてある。
生れて半歳からこゝでお世話になり一年六ヶ月

になったのが今では最年少ださうな。この子が屋
上庭園のスベリ台に一人で上りかけてお客さんの
私達へチョココンとおぢぎした。積木、木馬等てそ
れく遊んでゐる。

階下にお風呂場がある、タイル張りの立派な。
大きい子供の爲には深く、この乳幼児組のは特に
小さ 浅い湯槽。これに毎日いられていたゞく。こ
の一組を若い保母さんは一人づゝ着物をぬがせ
る、湯槽に入れる、洗ふ、拭く、着物を着せる、
室につれて行く。それが時にはごみだらけのや、
たまには腫物のあるの、鼻汁の出てるの、そん

なのを毎日入浴させておいてです。

是等がいゝ氣持でお晝ね、落ちないやうにしてあるベッドに一人づゝ、洗ひ清められたシーツ、枕かけて、すぐスヤ／＼と眠るのもあるが、中にはキウーピーを抱いたり、繪本をいぢつたりしてもぢ／＼してゐるのもあつたがしばらくの後行つて見たら一人残らず熟睡してゐた。この室は極寒の時でも必ず六十度以上に暖められてゐる。是にツイいたペランダ式の一室は四方硝子張りです。ことに理想的な一室、こゝにも幾つかのベッドで眠つてゐる。寢顔の愛らしさにひかされて一人づゝ顔のをぞいて見た。

お晝食は疊の室で。チャブ台が四つ程並べてあり、是をみんなが圍んで家から持つて來たお辨當を行儀よく食べてゐる。隣が台所、家から持つて來るのでは時に營養が不足なので市から日々味噌汁とかお豆腐汁とかを補給される。今日はスープ

でお豆腐汁で、お汁お汁とどの子もお代りをして、おいしさうに食べて居た。

或時寄附があつたので脂肪分の多い食事を皆に食べさせたら皆のうたふ唱歌の聲がいつもより大變力強く保姆さんに感じられたので、その後は猶更出來るだけよい食事をさせ度いと願つて居られる由。

屋上の一隅に一つ身の着物やちムツが竿にかけてある。着る物迄保姆さんのお世話で、家からきたない／＼着物を着て來るのは、着かへさて下さる。寄贈された衣服を解いて洗つて宿直の保姆さんが縫つて着せて下さる。それ故この子供達はきたない感じはちつともしない。

かうして遊んだ後又お八つをいたゞいて四時頃歸る。親の都合で六時頃にもなる。

普通の家庭で四歳位迄は何をするにしても人の手を待つて生活してゐるのをのみ、見なれた目に

はこの保母さんのなみくならぬ力を感激なしには見ておられない。従つて市の行き届いた設備萬端と温かい保母さんの心によつて僅か生れて一年餘から、知らず知らずの間に一人づゝの生活を習慣づけられて行く有り難さを感じた。

右の乳幼児室が普通の幼稚園で見られない所では五歳組六歳組、七歳組と三つに別けて夫々の保母さんによつて保育されてゐる。乳幼児室から引つゞいて来るもの、他からはいるもの等にて。

朝の六時から夕方六時迄の保育案、日曜の保育案、四時には歸る事になつてゐて家庭の都合で六時から六時迄居る少數の子の爲につくられてゐる保育案。この早い朝のために遅い夕の爲に保母さんには宿直がある。

右の保育案でも明らかであるが實際の保育を見ても託児所ではケイヤーが實に行届いて行はれて

ゐると思ふ。去年の夏の倉橋先生の講習でのお話をしみて、今思ふ。勿論こゝでは必要にせまられてのケイヤーであつて是程にすることもあるまいがあるそかになりがちのケイヤーをもう少し考へねばなるまい。

夫々の室で切紙、遊戯、恩物遊び等見たが是等は特に變る事もない。お辨當は、大多數は家から持つて来るけれども中には給食されてゐるのがあつて御飯も、お菜も西洋皿にいたのを食べてゐる。やはりお豆腐汁も添へられて。幼兒は各自保育料二錢(是さへ免除のものあり)お八つ代二錢づゝを持つて来る。保母さんはお辨當の際受取つて受取を又お辨當に入れて家庭に持ち歸らせる爲にこの時は大變に忙しい。このお勘定に、お汁のおかはり、お湯をついでやる、保母さんは幼兒と卓を圍んで談笑の中にお辨當をいたゞくなどは夢にも出来ないこと。代り合つて一時半頃迄に

一週間の保育案

土	金	木	水	火	月	日	
同	同	同	整頓 同	眼治 同 耳療	爪治 同 切療	園個自 體人由 遊遊遊	十午 前六 時時
同	同	同	同	同	同	會 集	十十 時半 時
遊 戲	觀自 然 察物	お 話	自 由 畫	箸五 並 べ色	積 木	恩 物 遊	十十 一時 時半
同	同	同	同	同	同	食手 事洗	十十 一時 時半
同	同	同	同	同	同	自 由 遊	二十 一時 時半
遊共 戲同	繪 本	つ自 然 ぎ物	細毛 工糸	織 紙	張 紙	切手 ヌ キ技	三二 時時
同	同	同	同	同	同	お手 入 つ洗	三三 時半 時
同	同	同	同	同	同	自 由	六三 時半 時

すませられる由。二時迄が自由遊。たまに砂場を

掃除すると知らず／＼に埋つてゐた、一錢銅貨がそれは／＼澤山出ますと保姆さんのお話。折柄おどけ姿のチンドン屋が一層チン／＼高くならしてこの前を通ると今迄遊んでゐた數人の幼児は吸はれるやうにかけて行き塀に上つて見る。わざと子供のをそゝりに來るさうな。前通りずつと並んだ市營住宅の窓から一人の半白の老人、ものうげに外をヂツとながめてゐる。こんな風景はさすがに託兒場ならでは見られない。

前の乳幼兒組は手のかゝる事は是等の數倍であるが保姆さんの心のまゝに素直に行動してゐると思はれるが段々大きい組になるにつけ、親の、家庭の影響を多分に受けて性格上保育しにくい點が多かろうと思ふ、是がなみの家庭の子をのみあづかる人に知られぬ託兒場の保姆さんの容易ならぬ苦勞であらうと、それは自由遊の際殊に感じら

れた。

こゝに來てゐる幼兒をかうして見てゐると着物はさつぱりしてゐるのでさして貧しい家の子とも思はれないがどうして／＼夫々になまやさしい事で生活してゐるのは殆んど無い。

母一人で四人の子を育てゝ居る、三疊に六人の家族が三枚のせんべい蒲とんにねて居る。

鼻緒の内職で前鼻緒をつけるのに五十で僅か十錢を得る。

ひろひやでは迎ひに來た母親の顔色がよいとひろひの多かつたのを知る。

大體こんな様子であると。

猶こゝの北井まするさんが私達の爲に左のやうなお話をして下さつた。

「皆さんがかうした所を見て下さつて少しでも世の中に託兒所がわかつて下さるといふ事はほん

とに嬉しうござります。

こゝを御覽になりますと、託児所がそんなにひどい所、きたない子ばかり居る所とも思ひになりませんでせう、さう思つて下さる事はほんとに私共の誇りなのでございます。でも以前は随分ひどい建物で殊に震災當初のみぢめな託児場、皆様の御記憶にもおありでせう、千駄ヶ谷などで空地を利用してテントを張つての保育、あの頃の事を思ひますと設備も十分、幼児のみなりもさつぱりして来たといふのが私共はほんとに嬉しうござりませぬ。

震災直後或る特志家の莫大な寄附金がありました。それを如何にやくだゝせるかといふ時に當つて、倉橋先生やその他の先生方がまづ託児場の保姆さん方の保姆としての教養を養ひ高めるのが急務であるとの御意見で諸先生方の御盡力で古川橋（もと東京府古川橋託児場）に託児場保姆の爲に講

習を開いて下さいました。私共は子供を歸してかたずから時とすると時間に間に合はず、電車は非常に混み合ふ、仕方なく通り合せの誰れ彼れの自動車をとめて譯を話してお願ひし最寄りの處迄乗せていたゞく、或時など侍従の方の車に乗せていたゞいて恐縮した事もありました。お遊戯は土川先生に。覺えた積りぞ考へ／＼歸る途中で忘れてゐる處に氣がつく、銀座の通りで場所もかまはず友達から教へて貰ふ、明日子供に是を教へようといふ心には通りが／＼りの人が笑はうと何しようといふ心なものでした。今、かうして建物は立派になり子供だけ見てゐると何の變りもないといふ事はあの震災直後にさうした諸先生方のおかげと市の大きな力、特志家の厚い情の賜と私は實に／＼嬉しうござります、と。つゞいて、私があの保育案で見れば日曜も休みなし、日々のお歸りは遅いので保姆さん方の體が續くかしらといふ問に對し

て、

「月々第一、第三の日曜が休みです。こちらの保母さんはみんな若い方ばかりですが殆んど休みなしによくおつとめです。中には吉祥寺(編線)の方から二時間餘もかゝつて日々おつとめの女學校出たちの若い方なども、家がそんな遠くでも疲れもしないで一生懸命して居られます。」

時にはこちらに來て間もない保母さんは、私に先生、幼稚園と違つてひがみが強くてちつとも思ふやうになりません。託兒場は保育がしにくくて苦しいといふ人があります。私は、來てすぐにそんな事は云はれませんが、まあ辛棒してやつて御覽なさいと云ひますが、やがて半年一年とたつ中大變らしくなりました、思ふやうに子供が動いてくれますと云はれるので、半年の経験は大したものでせう、その力強い経験によつて子供は自然と思ふやうに動いてくれるのですと云ひます。

夕方、ほかの子は皆家に歸つてしまつたのに一人の子だけが残る、いつもの時間が過ぎてもお母さんが來ない、その時は、いつ迄も残つて居て厭だとは決して思ひません。あゝお母さんが遅いけど、どうしたんだろう。何か變つた事があつたのではないか、と心配になります、子供の心に代つて母を待つて居ります。」

北井さんのお話はどれも／＼私共の心を強く打つ事ばかり、たど／＼しい私の筆ではつくし切れぬことを惜しいと思つた。

健康相談

三月二十七日、再び玉姫市民館を訪ふ。健康相談の状況を觀に。

市民館での仕事の一つとして火金の午後二時から間島偶氏御擔當で健康相談が行はれる。この先生の御診斷振り、この階級の母親達への應答ぶり

等拜見したいと思つたが御都合にて今日は女醫の方。

ストーヴで暖められたかなり広い一室にはお母さんが夫々子供達の仕度をして順番を待つてゐる保姆さん(託兒所醫務専門の)が一人づゝ赤ちやんの目方をはかつて記入してゐいで。

別室の寢台の上でも母さんは赤ちやんの着物をぬいで診ていたゞく。先生は體重表を見ながら丁寧に診察してそれゞく適當な處置を教へて下さる。

「よく肥つて來ましたね、こんなに目方がふえた」

「さよですか、今日はお乳の相談に上つたんですか」

「一日何度位」

「七度はかり、ミルクが四度で私のが三度です」

「六回になさい、ねエお母さん」

「へエ、どうも通じが固くて困るんです、毎日洗腸してますが」

「洗腸はいけない、癖になるから、少しお砂糖湯のをまかせてごらんなさいよ」

.....

「少しお腹をこはしちやいまして」

「さう、お乳が多すぎるんぢやない、こんなに目方が減つた、一日何度やつてるの」

「へエ、七度はかり」

「七度、そりやいけない、一日ね、朝の六時からあしたの朝の六時迄に六度ですよ」

「夕方迄に七度やつてしまふので、夜中はチョイ〜」

「そりやいけないよ、お母さん、六度にして下さい。三日ばかりお母さんががまんするんですよ、さゞとよくなるからねエ、お乳のきまり

をつけませうよ」

「へへ」

.....

子供二人連れて来た若いお母さん、赤ちゃんは異状なし。五歳の子

「これ肋膜炎をしたんですが、もうお医者さんがいへとおつしやつたものですから薬をやつて居ないのです」

特に丁寧に診察。

「お母さん、まだいけませんよ、薬つゞけなけりや、すつかり癒つてゐませんよ」

「さうですか、寒いと遊ぶのが厭だつて家にはから引込んでゐますよ」

「たしか濟生會だつたね、薬いたゞく方がいい」

.....

「私の乳がちつとも出ないもので、どうでござんしよ、重湯ませたら」

「どうして、まだこんな赤ちゃんに重湯は無理だ、乳首はチカ附けでせうね、見せて下さ

5」

持つて来て牛乳瓶を見て貰ふ。

ここに来たお母さん達はみんな正直だ。ありのままをそつくり打あけて話す。云つて都合の悪い事や、恥しい事でもかくさず相談に来る。お医者さんも保母さんもそれに對してまことにあたゝかい應答をしてゐるのでそこにも此處にもまことに美しい雰圍氣がかもされる。衣食住だけほんのチョツピリ人なみに足りてゐると、たまには、體裁や、つくろひもしたくなる、そんな事なんぞはねどばされてしまひさうな氣がした。

~~~~~